

けふ御下男の藤助どの此所の門をば通られ候まゝ呼こみて御様承れば何とはなしに物歎かはしう思し召大かたは御部屋の内うちに計おはしますとや平常うち氣の御前様この度のことを御心おんこころにかけられ沈みおはしますこと御道理には候へど試験の及第のみが御名のほまれと申すにもあらざるべく御平常のことは知るほどの人しりぬべきに候かゝるさゝやかなる事に御心おんこころいためられ御病氣にても引出し給ふやうにてはゆく六づがしき世の中をいかに渡らんとか思しめす此は唯御足もとに小さき石の轉るるにひとしく御躓つまずきはありたりとも御進み遊ばさるゝに何の大事か候はん若葉の梢すゞしげに春はきのふの森の下露いと心地よき昨日今日を左る御籠居に暮し給ふは何よりも何よりも有まじき事と申上度候御兩親様とても此失敗のつくのひには身に病やまひをまうけて心配しんぱせくれよとは仰せらるまじく御恥かしと思し召は御前様の平常よりをしはかりても御尤おんつとに思ひやられ候へど此日頃の御舉動は此方うけ難き事に候相成るべくは此失敗を彼れにかへて一層の御勉強この次には目ざましき事をと此様のおほし召願度たれもうき世の過ちなき者は候はず此方御前様より少しも年の數多ければ夫れだけに過らの數も候歎きつ悔みつ思ひかへしもしつさて追々と進みゆく事と存じられ候に

左のみは思し屈し給はで御立出も相成度こなた庭の面に老鶯のさへづりをかしく藤もやうく景色みえ初候間一日おはしまして御茶めしあがり御氣ばらし遊ばされ候やう何も年上の申すことなればと御用ひ相成度候 かしこ

●同じ返事

御ねんごろの御文有がたく御禮申上候人々よりもさまゝ叱しかられつ慰められつ今少し心を廣う持て此次の度を心かけよと申され候まゝ成ほどと思ひかへし昨日今日は此過ちを左のみは心にとめおかす至極氣樂のつもりに候へど何か外に遊ぶはものうきやうにて唯此部屋このへやのうちの好もしきに候花のさかりは試験に暮し若葉のかけには此やうの思ひ添ひて立出るに憂ければ縁のなき年とも申べく藤つゞじの盛りも過ぎなば田舎の親族かたへ二月三月參るべきつもり扱少し此失敗の取かへしをと考へ居候遊あそびに來よかし話はなしもして聞かせぬべきとの御仰せ嬉しけれど御目もじする事いかにもいかに愁うれささやうにて相成るべく逢ひまつらじの心に候間我まゝのほど御恥かし候へど御見ゆるし置下され度今御詫び申上る折もあるべくやと唯かしこまりてのみかしこ

●不縁に成し人をなぐさむる文

小雨降くらししていと物のつれづれに覺えられ候をさなき御方はをとなしういらせられ候や御媒妁人とは申せ御親族にもあらぬ家にかゝりおはしますなれば御心づかひいか計にかとおし量られ申候かゝる御子さへいらせらるゝを唯に思し捨てゝ願み給はぬ且那樣御心根こゝにて承るさへ情なき事と存じられ候に増して御心の中いかならん必竟は例の鑛山のこと御心にも適はざりしより御煩悶のやるかたなく世はいかさまもなれ子も妻も我れには不用ぞ唯ひたすらに飲むこそよけれの御亂暴とおぼしく左は申せども御道理のなきには候はずやがては御夢さめて更に御上戀しうも成り給ひぬべく今唯今こそむづかしうもあれ御迎への参りぬべき事極まれるに暫時の憂さぞと忍びおはしましやかなる事にも御氣落など遊ばされず其御子様御大切に御養育いらせらるゝやう致し度この降雨につれづれいかやと思ひやり奉りて心計を文し上候此一重めづらしからの物なれども稚なき御方のお慰みにもと御覽に入れ候何も時機に候へば廻り來ん折を待給へかしこ

●同じ返事

今稚なきも膝に寝入て一層軒ばの雨の音淋しく縫物するも物うければ疊紙は開きながら針箱も押やりて獨益もなき物おもひを續け居りしに候處あはたいしう人の驅け來て御使ひのありといふ誠に昨日今日肩身の狭き身の上なれば奥に客來の賑はゝしき事ありとも此方は唯々よその祭りと見るばかり家内の人にさへ左のみ詞もかはし申さず増して文などの参ることいと稀なるに思ひかけぬほどの御使ひは若し誤りにはあらぬかと疑はるゝまで嬉しうて何か以前の身に立歸れるやうの心地いたされ申候御文くり返し拜見けふのつれづれ思しやらせ給ひてをさなき者へと御心入れの二重目さめなばいかに喜び候はん此兒よろこばせ給はる方は今日此頃の大恩人に御座候これが少しも皺面をつくりて嫌々など申出し候時は慰むる言葉も盡きはてゝ人見ぬ折は共泣きに候仰せの通り彼の鑛山のこと無かりし前は左のみあらゝしうも無き人に候ひしを生れかはりしやうの夫の亂行一つは私萬事に心のとゞかねば機嫌のとりやう宜しからぬにや候ひけん身には何事の罪ありとも覺えねど家風にあはぬと申さるゝ詮なさ千たびの詫びの甲斐もなく今斯く中空のやうに此家の世話を受け居り候こと誰れやらが言ひし女子の宿世の淨きたる事まことに思ひしられ申候あの人あのやうの性質に

もこれあり一度申出したるを更に引かへし申ことならねば取あやまりても再度かしこへ迎へらるゝは叶ふべきに候はず今國もとより兄にまれ誰れにまれ引取りにとのぼられ候はゞ私は此兒を引つれ立歸り田舎人に成りぬべきに候さしも猶春秋の折々おぼし出で給はゞ御訪はせ下され度田舎の家にも父母なきに候へば物ごとにかに心愛からんこれよりの幾年此兒が成長せんまでの苦をおもふに唯々胸のいたく候されど此様のこといも結局は愚痴のくり言にて甲斐なき事を打敷くはお恥かしき心の底を打わるやうの物に候御聞流し下され度は是よりは凡ての事を忘れはてゝ此兒の養育専念につとむべく此兒をば貰ひ得られしを幸ひとして他には何も思ふまじく候されば此地にあらんほどは更なり田舎ものに成りぬるとも折ふしの御心添へ何とぞ願度あまり思し召の嬉しきに用なきことまで御聞に入れ申御使ひ何處やらまでとか参らるゝとて文箱さしおき去なれしを幸ひ此やうの長手紙あつたさき揃はで御判じがたくやいと御恥かしう候かしこ

○愛子をうしなひし人のもとに

彌太さま御こと小學校への御筒袖姿いさまじう見あげしはきのふと思ふに御俄なる

さまにて彼の唱歌の御聲またとは伺ひがたきこと思へども御いとほしく候大路を行きて同じほどの大ききなるが何時もめされしやうの八丈の羽織など着て物のかけより走り出るを見ればやゝと聲もかけつべく思ひかへしてはおはさぬ成けりと知る時涙ただこぼれにこぼれ候何ならぬ私だにあるを多くの御中に唯一人御男にて御覽じたるなればさして御寵愛深うおはしまし葛飾の御田どころ幾町とやらんは彼の御子様御料におぼし置末々御分家の上は御夫婦ともその御後見にと御取さまりも有し由我れば農學士に成りて處々の開墾をなし父様御宿志をもつぎ兼ては軍人に成りて勇ましき功をたて金鵄勳章をば此むねにかくるのなりと大威張遊ばされしこと御子たちの常なる豪傑すきのみならず眞に御名をあげ給はん思し召學校の御つとめぶりにも顯はれていと頼母しく存じぬしを斯るさまの御口惜しさ推量にも餘り候御葬儀の折御見おくりにと罷出しに御父君は唯ものに驚き給へる如く御弱りともなくて夢心地のやうにいらせられ御前様は御平常の御病ひにも障らせ給へる由にて御床のうちに伏し居給ひしさま見参らするまゝに堪へかね申候ひき御尤なる御力落しは干たび申すとも盡くまじう忘れ給へと申上るは近頃失禮の言葉かと此方思ひ居り候へと左りともひたすらの御追慕

に御病中なる御身をも厭ひ給はず雨風にもさへられ給はで時には日のうちに二度までの御墓参り遊ばさるゝ由そは却りて佛の御爲にはならせ給ふまじくかつは御身の大事に候残らせ給へる御娘たち御一人は御縁さだまり給ひぬともそれよりの御次々いと多くおはすなるに此御歎きに身も弱らせ給ひ何事も捨ておはしますやうにては相成らず彌太さま御大切成りしはもとよりなれど嬢さまがたに思しかへて御身の御保養相成度この方のやうに一人の實子もなく成しものさへあるを思しやらせ給ひて此事の御あきらめ相成度候父君はやうく御平常にと承れど猶いかさまにや御老體に候まゝ殊に御大切に存じ上候私かねて一人子を失なひし其悲しびに思ひくらへ唯今の御さまいかにやと推量られ候まゝ斯くは文し上候さりながら歎かせ給ふなどはえ申上かたきものに候 かしこ

●同じ返事

葬送の折および喪中の御尋ねまで頂戴いたし御志ありがたく少し心地よきさまに候はゞ御禮の文をもさし上度と存じながら何か筆とる事など物うくて思ひながらの失禮に候今朝はふりはへ御ねんごろの御書まことに仰せの通りの朝夕餘りおろかしう取

みだしたるさま心は闇にあらねどもと御憐れみ下され度おもへば御もと様御一人子を失なひ給ひし當時の御心いかなりけん此處には娘たちもいと多く總領の方には今孫さへも出来んとするを何を不足にしてと我れながらたどられ申候取わきての寵愛といはんはをかしけれど老後のなれば唯可愛ゆくて御恥かしき事なれどあの色黒を手の内の玉とかしづきしに候へば長くだに煩らはで唯三日がほどのくるしみに看病を盡したるも充分ならぬ心地のみせられ天狗などの来てかきさらひ行しが如く思はれ申候日ごとの寺参りこれこそは物狂ひの處爲と家内のものにも止められ候へど何か此部屋かの部屋かたみの處のみにて其障子のかげよりや此ふすまの彼方よりや不圖たち顯はれて母様と聲かくる事なども果敢なき事を考へ申しづかに居るは堪へかね候まゝ思ひたちてはやがて出申に候父は流石に男なればあの兩三日こそあれ昨日今日は左のみ口にも申出さず私のいひ甲斐なきを意氣地なしとて叱り居り候さりながら今日は此お返事これほどにも物とりまじめ認め得られ候へば今もと通りにかへるべくいかに淋しさの堪へ難きに中々なき人の上をかたれば心なぐさむ心地に候まゝ御暇ならん折御訪はせも給はらば辱く御禮ながらの御願ひを申上候 かしこ

●火事見舞の文

唯今出入の植木や参りて昨夜御ちかくより出火の由かたり申され始めて承知おどろき入りて御見舞申上候うけたまはれば御裏町より出火とさきの間に表までもえ抜け候てさしも敷奇をば盡し給ひし御茶室よりはじめの御庭の樹木御母屋まで半は烟にならせ給ひし由いかなる事ぞ此方區内の鐘は更に打ち申さず其事ありしは夢にも存じ申さざりしかば今まで人をも奉らざりしこと深く御詫び申上候御老人さまもおはしますなれば御心配いか計にか候ひけん先はみなく様御怪我もなく御立退き遊ばされしを御嬉しき事に存じ上候何も取あへず重の内ならびに酒一樽もたせ上候午後よりは私うかがふべきに此宿にて御間に合ふべき御品物なども候は御遠慮なく御入用おほせつけ願度くれぐも昨夜うかやはせざりし御詫び申上候 かしこ

●同じ返事

御叮嚀の御見舞ありがたく人々うばひ合ふ計にして頂戴大助かりに候御存じなかりしは御道理たい手のひら計やけたるに候へば近き處の親族などへ未だ参らぬが多く候此方忤申すは今少し大火にもあらば焼け祭えもあるべきを籠の中ばかりの火にて大

騒ぎをしつる残ねんさと口惜しがり居申候庭廻りより母屋まで大かたは焼うせしに同じく残れる處もつきくづしなど致したれば形のあると申ばかりに候藏二つは目ぬり早くに手の廻りて幸ひ無難に候まゝ仰せ下されし當用のものにも事を欠くまじく未だ何事も手を下さす候へば其ほど調へもつきがたけれどあたふ限りは取納めたるつもりに候御安心下され度先は御禮のみを かしこ

●負傷見舞の文

容易ならぬこと承り申候御取こみいかやと推量りみづからは参上も致さず文にて御様子うかひひとと人さし出し申候旦那様御こと今午後かねて新聞の廣告にて承りし何がしの會など御臨み遊ばされん爲御車にて何がし町までおはしたるに忽ち物かげよりびすとるをもつて傷けまつりし者有し由人々の申口とりくにて手前かた書生の聞参りしには御かすり手の淺々にて濟み給へるやうにもあり隣家忤などの取沙汰によれば御脇より玉の入りてやと承るまゝに胸とらるるにいかにもあれ御様子うかひ見ばやと筆はしらせ申候犯人は夫々の手にて捕へられしに候や良人この地に居り候はいたいに参上も致すべきを御存じの留守中にて夫れかなはぬは何とぞ御ゆるし下

され度何もとりのあへすうかひばかりを かしこ

●同じ返事

疾く御耳に入りし由にて御尋ねかたじけなく候まだ何人のしわざとも知れ申さず彈は二の腕より脊にかけてつらぬきしにこれあり一時の出血はおびたしき事にて候ひし何の道入院の上療治せではかなはぬ由例の醫學博士今參られ手あて致し居られ候さりながら當人は私のおどろきほどもなく至極の平氣に候まゝ斯くては療治もたやすかるべしとのこと御安心下され度何も書みだりて御返事のみを かしこ

●地震見舞の文

一昨十五日の夜の地震は東京もいつよりは時間少し長く戸外に走り出でし人など無きにはあらざりしが棚のものだに落ぬほどなれば左までの事とも存じ申さず候ひしに今朝ほどの新聞にて見候へばさてく御地のすさまじかりしこと地もさけ川もあふれ潰れ家怪我人歎しれす夜より朝にかけて震ひし數は五十度今も猶折々の小さきは絶るまなく人々野宿して安き心もなきよしと御座候御家あたりは場所がらいか候ひしや同じ町といへど處によりては左までにあらぬもあり多くの中に唯一構へつぶれ残れる

家もありなど書かれたるは其御幸福のうちなれかしと祈られ申候御様子承り度さしいそぎ文奉り候 かしこ

●同じ返事

おそろしき夢のまだ覺はてぬ心地にて有さま委しうもしたゝめあへず大かたは東京の新聞にて御推量りの通り開闢以來と一口に申候へど見ぬ世は知らず我々とし若きものたちが目にも耳にもいまだ見聞きおよばぬ大事に候ひし時は夜の十時ごろにや良人は役所よりの調べ物たづさへ歸りてともし火のもとに繰かへし居り私は其處より二間隔てし小さき部屋に子供寝かしつけ何時ぞや御送り下されし何がしの雜誌よみ居しほどに怪しう海嘯のよするやうに物すごき音のするを何ものとも存せずながら兒かき抱き立あがりしに良人は奥より聲をかけて燈火に心づけて表に出よ地震はすさまじきぞと申さるゝに早何事も覺えずらんぶを吹消して足袋はだしのまゝ庭へと飛をり物のあやふげなき垣根際にとちたる時其妻まじさは今も目に残りて何とも申すに言葉なく候少し心落つき候は有さま文し御覽に入るべく此方住居は隣も近からず平屋づくりにて屋後には竹籬など候まゝ中にては震ひかた少なきにこれあり壁の土を落し瓦

の損じなどにて事すみ申候へど此方つねく日用の物かひに行く何がしの町は潰れ家より火の出で、百戸の人家ことく焼うせ顔見しれる人々の梁の下に成れるもあり焼死せるなども少なからずすて思へば恐ろしき夢に御座候ひしおほせの通り小さき地震は今も猶折々これあり日のうちに二度も三度も箸もちながら駈け出るやうなこと珍らしからず人々物おぢして風の音にも勝ひやし居り候されど最早大した事はなかるべきやう東京より出張の學士など申され候まゝ先は御安心下され度いづれゆるく文さし上べく取まとまらぬ折からなれば唯事なきさま計を かしこ

●盗難見舞の文

昨夜は我れおもしろの哥留多遊びにお初様與五郎さましひて御引とめ申上夜中すぎまで御人すくなにさせまじつる申わけなさ今警察の前にて御下男御届けにと參られしに此方悴出會ひ申御ありさま承り參り候さてく驚き入たる事どもぬす人は宵のうちより紛れ入りて御物置き二階の薄くらきにしひ居り御人を寝しつまり給ふを待るしかとのこと御紛失品の莫大成しのみならず御衣類なども御奥座敷にゆるくと撰みわけ殊に御立派なるを計持行しとはいかにも膽ふとく憎らしき處爲御家の案内しらぬ

もの、出来得ることならずと御下男申せし由なれど何か御心當りなど候にや此方たゞちに御見舞にと存じ候へど年始の客人それよりそれと立こみて座をはづるゝ事なり難く文して御様子うかいひ上候御驚きの餘り御血の道などにも障らせ給はずやお初様近御目出度の御支度にとお取寄せおきの物など如何候ひけん夫れをば殊に御案じ申され候此方御兩人を御引とめ申さずば自づから御締りのくまん御氣づき遊ばされ人忍び居るたよりもあらす候ひけんを何れは御人少な御手廻らでと此事真に御詫び申上候御見舞までに かしこ

●同じ返事

立田の山も行かぬものを夜半の白波ざりとは淺ましき事にて候ひきお初與五郎の歸宅せしは十二時少し前ぐらゐにて種々おもしろく遊ばせ頂きし話など致し床に入りしは何時よりも少し計おくれしにこれあり其時月じまりは私の役なれば例の通り見廻りしも火の用心など心づけしに候へど物おき二階までは遂ひ見及ばで彼のやうの事にも成れるに候斯る災難ある時のならひ何時も眼さとくて鼠のおともやがて耳引たる私のいとよく寝入りしこと今朝がたまで一度も夢さめ候はずされば緩々と品の撰り

わけなど致し行し暇充分にありしなるべく大かたは曲者一人にはあらで先きに忍び居つる者みちびきをなしやがて中間の襲ひしものなるべくと察しられ申候おほせ下されしお初が支度のもの夫れは澄ましう持ゆかれ差當り此さしつかへに困り入候御存じの通り何事も氣樂の娘に候まゝさのみ歎きもし候はず種々の用意は身に不相應なりと盗人の思ひはかりて此やうに持行きくれしなれば最早とりわきての支度にも及ばず母様も歎かせ給ふたと申居り候へど私はこれのみ残念に思はれ候御察し下され度下男などは此曲者かならず家内のこと知り居るものゝ處業なるべしと申候へど何かは夫れに限り申べき燈火を手にして家内中ゆるくと探り求めしに候もの何のあり處か知れずには居候はんや今更の騒ぎは出水の後に堤の沙汰をいたすやうなもの甲斐なき事にてお恥かしく候年のはじめの初夢にはいと恐ろしかりしこと胸には手をも置き候はぬをかしこ

●病氣見舞の文

御母上様御容體けふはいかやうにいらせられ候や俄の御日和にて何となく頭おもちく覺え候を御障りなどもやと御案じ申され候御醫者かはらせ給ひてより初めての御藥

と昨日登上の節うかいひしが御様子いかゞ夫れによりての御験しなども候はずや今日もあがられ得べくはと存じつれど人參りて其ことかなはず候まゝ使にてうかゞはせ候御病人さまは未だにをもめしあがらずと承りこれは御伽の衆へと參らせ候御晝飯の御間にも合へかしと急ぎ煮あげて不加減のたん御ゆるし下され度一重はお前様きのふ仰せられし笹まき鮮此あたりより取よせしなれば御口には合ふまじきや唯少々々奉り候御手すくなに御病人さま御看病あそばさるゝなれば嘸かし何かと御不自由なるべく若し相應の御用も候はゞ此處に何なりと御申つけ下され度きのふ申上んとして何か其まゝの歸宅とりわきたるやうに怪しけれど文にて聞えおき候とかく御病人さま御大切に少し御快き際など別しての御心づけ專一と存じられ候何も今日の御様子うかいひままでに かしこ

●同じ返事

母こと病氣御心にかげさせられ屢々の御訪問ありがたく今日は御容様にて御せはしういらせられ候御中わざ／＼御人にて御養物いろ／＼私へと取わきての御重の内まで數々御禮申上候人出入は多きに家のもの少なきなれば唯上を下へと騒ぎのみ強うて物

養る心もつかず候へ御心入れのほど一層かたじけなく存じ候御尋ね下され候病人の容
 體ひとつはお醫者かはりしよりの思ひなしか今日は何時になく出来よろしきやうに候
 としよりの事に候へば殊に目だちての驗しなどは如何かと思ひつるに斯くては追々こ
 ころよかるべきかと樂しまれ申候御安心下され度唯この不食の處少し案じられ申候へ
 ど胸のさばきだにつかば飯湯など今にたべられ得べく扱はいよ／＼此方のものと御醫
 者申されしを力に御座候未だ海山とも分きがたけれど不圖みる處はよろしき方に候ま
 まの御返事このこと引つゞきなばと思ひ居り候 かしこ

●友の故郷に歸るを送る

いよ／＼今日に成り申候昨夜は更るまで御妨申上それ／＼の御支度も候ひけんを心
 なき事ども御ゆるし下され度候雨ふらは今日の御出立あすに延び候よし左らば汽車ま
 での御送りかなふべしと存じつるを中々の晴れ口惜しく候昨夜も申上し通り唯今何が
 し醫院に入院中なる伯父のもとを一日おきには必らず訪問ぬべき約束これあり病人こ
 れをば樂しみて待居候なれば違へかねて御前様への失禮今その處へ参るとて衣ぬぎか
 へ候にも今一度御目にかゝらぬを残りをししく切めてはと文に致し申候嬉しき事にての

御歸郷なれば唯よろこびてのみあるべきを左もつゝしみあへず心細き思ひに候昨夜も
 寫眞の事仰せられしを如何にも見ぐるしければ今寫しかへと御斷り申上しが今更御
 心をもどきしこと悔しうて何もつゝみあへず奉り候うつれる影はさておきて心ばかり
 を納め給はらばや御五月蠅ともこれより屢々文奉るべきに折ふしの御返し必らずと
 待上候御道中御つゝがなきやう彼の地におはしつきて後も今日の御交りのさながらな
 るやう共に祈りて此文をばしたゝめ申候花の春月の秋こゝには大空をながめて御あた
 り思ひやり奉るべきに今宵は暎なとも此曉は如何ならんとも思ひおこせ給はらば嬉
 しかるべく盡させぬ事を短かき文の口惜しけれど心に筆の伴なはねば唯わすれ給ふな
 とのみに墨おしぬぐひ申候いと甲斐なくて かしこ

●同じ返事

今一かへり御暇乞ひにも出づべきを反對なる意り御ゆるし下され度候昨夜は御入に
 て御儀別の品々給はり今日はとりわきての御使ひにて寫眞の御恵み御志のかたじけ
 なさをば唯いつの世にか御禮申べきと斯く別れ参らする身の行かたなき心地せられ候
 かり初のやうにて過しつれと數ふれば三年の春秋御懇意下され候て妹のやうに御いつ

くしみ下されしを取る年の甲斐なき豫てさだめの時にも相成り候へば追願ひも叶はず是非とも歸郷いひ渡され御恩がへしのみか言葉にての御禮もいひあへぬほどに御別れ申上ること誠こゝろのほかに御座候此午後二時といふに汽車をのり出で、明日の午前には故郷の人に相成るべく扱は又いつ頃か立出でられ候はんや申上つる如き身の方さへつき候なれば此次嬉しき御目もじかなはん時は淺ましき田舎人に成り居るべきに候此家の人々および故郷より迎ひの者かれこれの支度など心づくれ候て私は唯身一つをもてあつかひ居候折なれば用なきくり言長く成り申候くれ、御両親様御大切に御孝養專一と遊ばされ申までも無き日頃の御勉強猶一しほにと祈られ候糸による物ならなくにとは眞なりけりと心細うて此筆いつまでも置くに憂けれど御使の人さぞと存じて何もこれにといめ候月花の折は御もろ共に打ながめ候はんよし大空に雲は出るとも花の梢に風はさわぐとも此契りのみは岩根の松の萬代までとぞ去るもの日にうとうは爲させ給ふな かしこ

●旅中郡の友に送る文

汽車もある世に殊更の物ずきと都のみな様笑はせ給ひしがさりと徒歩路の苦しさ

可笑しさ足弱の私つき添へるなれば道は誠にはかの参らで昨日やうく此里までたどりつき申候宿の主は良人がかねての教へ子にて氣心よく知れし親切の人に候まゝ心のどかに今二日ばかりは逗留いたすべきつもり人迷惑にや例の思ひやりなき同志うちそろひての處爲御わらひ下さるべく候軒ばの山に名は無けれど夕ぐれの松風あはれに淋しく前なる小川に入日のたひよひ都にも見る景色なれどこゝろ細きものに候田舎人の物めづらしげに東京の先生おはしたりなど取沙汰しつる物と見え人々紙筆など携へ來て是非になどそゝのかされ良人大きに困り入り我れは其道の人にもなきものを句の歌のと思ひもよらず書かば書をこそと言ひたきまゝに申せば夫れをくと又責め來るいかにするかと傍に冷めたき汗ながら打まもり居候へば筆かいとつて炭團の木兎の怪しきものをぬりたて候袖引ゆるがして止むるをも聞かず頼みなればと左りとは亂暴の事ども定めてあとより怒らるゝ事と其人々に對し氣の毒さ堪へがたく生れてはじめての愛き思ひ成しに其事は此朝の事にて其書さゝげ持ちて歸り行し人々打つどひ此里よりは一里あまりも隔たりたる何がし川に網を入れて鮭ふる魚をさながらのつかひも持たせおこされて驚き入り候一體の人氣おだやかに極めて眞面目の處に候粉名挽き

うたをかしく聞けば猶益踊りも致すの由曆は舊きを用候なれば今がやうく九月のはじめ菊の節句明後日ばかりとのこと旅にいで、又もや秋に廻りあふは追つきたるのなりなど打興し申候都いで、よりいくばくもなければ怪しう月日隔てし心地に其方の空うちまもられ候は猶うき旅の名に背かずをかしきは可笑しきとして何故となき淋しき御座候其地のさま御きかせも給はらばいと嬉しかるべく昨日までは大かた一夜泊りに御返事まち見るほどもなかりしが此宿には前申しつる如く兩三日か少し何くれの場所案内を頼みなど致し候は、五六日の逗留にも相成るべく其ほどに御便りもがたと待上候日記ものせよと仰せられしを宿りにつけばやがて疲れに何事も思はれず其日のあらまし覺えはあるやうにて遂ひ夢に入り候ま、今日まで更に筆をもとらず送り給はりし手張の一枚目に此旅の起因めきたるを書しばかりに候これよりの行先いとをかしく見るべき處あまたあるよし良人申候ま、夫れをば樂しみに待候へど例の何をば申きかせ候やらん此處の淵は何がしの僧正入水のあとにて是れに由縁ありと長々しき物がたり誠かと聞て涙おしのごへば非ずと打消されて口惜しき思ひしつる事もあり彼處の松は歌人何がしが庵のあとぞなど指しめされ態々の畑中を縫ひ行きて笑はれし事

もありすべて案内者の怪しきに候へば此日記いかなる物にか成り候はん書かばやがての御笑ひ草にこそかしこ

●同じ返事

軒ばに山あり垣根に川ある御旅宿のしかも主は旦那様御弟子にさへいらせらる、由うき旅などは御かごとにて羨みねとぞ聞え候さもあれ夕への雲に日のとりて松風あはれに音づる、時都の空おぼし召出らるゝは實に、と思ひやられ奉り候都はきのふも今日も雨淋しく何時も御入の時めで給ひ隣家の琴の音あればかりを慰めにして過し申候御出立の後まだ僅かに候へども此ほどに變りし事は私宿への曲り角に舟いた扉をかしく瀬戸もの、表札かけたる女名前の家のありし彼れは御前様御同藩の何がしとやらが控へ家と御仰せに候ひしが五日ほど前の夜物おきに火を放ちしもの候て悉く焼うせ申候往來に見あげて懐かしと思ひし一もと松おもはぬ畑に成り候て残念この事に候取沙汰さま、彼のうつくしき人はやがて暇に成り候ひき嬉しき事に指を折れば宿の小犬の病ひの癒えたる失せぬと思ひし頂戴の歌集見出たる勝手もと働いとよき女子の参りたる猶それよりも妹が例の支度にと御相談願ひし染もの、ことあがり殊に

美ごとにて少しも派手なる事はなく當人の喜び一重に御すゝめ故と辱く嬉しく候日
 毎のやうに御目もじして猶ものたらぬ心地に候ひしを増して此朝夕の淋しさ文參らせ
 たきにも御宿り定まらねば何とかはし候はん日々此愚痴申出しては妹に笑はれ申候
 御文くり返し旦那さま御書のかたりを拜見するに御傍にお前様が御心配いらせらるゝ
 御面かげ目のまへに浮かびて其人々態々の綱うちに魚もて來つる有様まで唯さながら
 に思ひやられ良人に斯くと申つればさても御多能の御事名畫の徳に火とならばと誰れ
 やらが自贊おもひ合されて貧家の冬をもしのがれぬければ雪ふる頃までに其御書一
 ひら乞ひまつれ我れ等に木兎のようは無し唯そのかたつかたをと床しがり候久しき御
 旅寝に見あつめ給ふ名どころのみならず斯る珍らしき事をさへ取いで給ふなればこれ
 よりの山も川も可笑しき御事さぞかしと思ひやられ申候御歸京は來年とやかゝるゆる
 ゆるの御ありきに書つめ給はん御旅日記拜見いつと樂しみ居り候此次の御文は又いつ
 頃の御便りなるべき其ほどいと待遠にも候かなやがて時雨ん紅葉のかげに御風めさぬ
 やう御心用ゐあらまほしく其事いのり居り候 かしこ

●山里にある乳母のもとに

其事となけれど戀しければ文さし出し申候此一日二日風ことのほか身にしむは近き
 山にや雪の降りけんなど人の申合へるを聞くにも若し其あたりより見わたしの何某山
 や白う成つる其山がふもとの薄原うらがれ渡る頃に成ればいつも御もと持病のりうま
 ちす起りてと覺え居候まゝいと物のおもはれ候此ほどのさま委しう承らばや此所
 には父母より兄弟たち私もかはる事なく學校にも參り針仕事の稽古も精出し居候へば
 何とぞ案じ下さるまじく最早かさね物および袴の仕立も出來るやうに成り申候こそ丹
 精に糸を引きておこしらへ下されし銘仙の彼れをば着物に仕たてゝ今日はじめて着候
 所縞がらよく似合へりと家内中にほめられ申候いと嬉しく御禮あつう申候斯かれば弟
 たちうらやみて姉さまは良き御乳母もて此やうに物などをさへ貰はせ給へど我れ等
 は母様の乳にて育ちたれば何も呉れる人なく口惜しなども言ひ其代り姉さまは繼子な
 れば父上母様は可愛がり給はぬのなりなど負けをしみをも申候へば如何にとも宣へ我
 れには田舎にも今一人親のある身ぞと威張り居り候春にもならば又その地へ遊びに參
 り度あまり度々にて與平どのに氣の毒なれど御もとより詫びいひて御寄せ下され度與
 の吉どのともぐく小川の魚つりいと樂しみに候此前參りし時あの子少し大きうならば

東京に出して商人の修業させたしとか申されしが數へにては十二にもなられ候こと年
 季といふに出さるゝつもりならば餘り年たけぬか 勤めよきよし人のはなしに聞き申
 候商ひは時計か呉服かと與平どの言はれしかど時計商は私うれしからず候呉服やなら
 ば行々いろゝの事たのむに都合よく候間なるべくは其方にと願ひ居り候さりながら
 私斯く言ひたりとの御話しは御無用になし下され度これにはたゞ不圖思ひしを打明け
 の内々なるに候與平どの聞かれなば又東京の嬰兒さまが我まゝいふて來られたりなど
 笑はれぬべき事もはや今日此頃他人にむかひて昔しのやうの我まゝをも申さじの覺悟
 に候まゝ嬰兒さまの名耻かしう候ともあれ與之吉どのに御申ふくめ東京へ行くは嫌や
 なりなど申されぬやう致し度此ほど絶えて御清書御見せもなきは如何なされしや學校
 への御通ひやめ給へるには非ざるべく左らば其作文をも約束の通り折々は見せ下され
 度ほかの人々には夢々手をもふれさせ申さず私一人見て御褒美は必らず參らすべきに
 候さて此次參らん折の御土産何にせまし御もとよりの御注文與之吉どの望みの品も前
 もつて一筆御申しあり度與平どのには瓶づめのものと極めおき候彼れだに持ゆけばい
 つも目尻に皺のをかしき御酒たべる人の好みは同じやうのものと覺え候此節も猶手づ

くりにして彼のからきものに舌打ちせらるゝにや頭の爲には大毒なるべしと此處の人
 たちあやふがれど久しう馴れたれば仔細もなきにこそ夫れにはかはりて御もとは少し
 も酒の氣さらひにおはせと血の廻りわると折ふしにりうまちすなど起らるゝなれば
 葡萄酒少々常々用ゐられなば宜しからんとのこと此次試みに持參すべければつと
 めて御飲みならひなされ度候いはやと思ふ事のいと多くて次第も何もとゝのへあへ
 ず猶今少しと首かたぶけ居るを姉さまは何時までとや文かき給ふと弟たちくつがへり
 て笑ふもあれば墨筆うばひて逃るもあり餘りに詫しければ又もこそと書きさしたるや
 うにといめ候此ほどの御様だにお返事つかはされなば嬉しかるべく候 かしこ

●同じ返事

まづは旦那さま與さま御はじめ貴嬢さまより若様がたにも御機嫌よくと承り御文
 さげ持ちて御喜び申上候この夕暮與之吉こと不圖おもひ出したるやうに東京の嬢さ
 まはいつ頃お出に成るやらん彼の山の雪の消えて此處の田の面に芹つむやうにならで
 は御出のなかるべきか我れは待遠しくて堪へがたけれど夫れまでに手よく書き書物さ
 しつかへずに讀まるゝやう成りゐて嬢さま驚かし參らせん夫れが樂しみぞと申候ひさ

然る處日ともし過ぎに御文参り春にならば御入下され候よしの仰せ與之吉をどりおが
 りて我れが申當しと喜びいり候春にならば種々の御土産を御持ち遊ばされ彼の田の向
 ひを遠廻りに車に乗りておはしますのなり我れは表にかけ出で、兩手をあげてさし招
 けば嬢さま車の上にていや〜と御首を振り給ふその時畦を傳ふて我れの駆けゆけば
 程もなくお車の前にいで御一處にのり度よしを申はれば嬢さまやがて抱きあげて我れ
 をば御膝の上に腰かけさせ給ふべし然してくるまは三太郎勘八等が垣根の前を矢のや
 うに走れば彼等はおどろきて羨ましがりて駆け出で、見るに相違なし其我が嬉しさ
 はいか計ぞと埒もなき事をも樂しみに春は〜と申候そのやうに言へど春は猶三月の
 後ぞと申せば困り入りて舌打して何故嬢さまは其やうに御氣の長き折角旨きころ柿も
 何もなくなりて仕舞ふべきをと萎れ申候此やうにまだ丸々の子供に候まゝ此前申上候
 御奉公のこと勤まるべきや否や其ほど誠におぼつかなく決して私一人子なればとて甘
 やかしを申すにはなく老爺も此ほどは其事申出さず成り候ひぬ切めて小學校を高等ま
 で終らせて其後何かに志ざし申べく何れとも參るは東京の地と極まり居候なればよ
 ろづの御世話御教へをも願ひ出るは御宅様に御座候旦那様奥様へ貴嬢さまよりよろし

う御仰せ上られ與之吉が事一重に御引たて願ひ奉り候私の身は弱し心配はこれが事は
 かり誠にはいかり多くて申上るも如何なれど貴嬢さまをば唯子のやうに存じ上居候ま
 ま私なくなりぬとも此子がことを御覽下さるべきやうに頼み奉りて夫れにのみ心を安
 め居申候かく年々に病ひ多くなり候は若き時盡したる心勞の餘波と人申候へど左る事
 もあるべきにや御案じいたゞきしりうまちす相かはらず強くおこりて十日ほど前より
 起居よくなひ候はず何に致せ瘦せの夥たいしきを人も氣づかひくれ候辱なきおぼし
 召にて葡萄酒のこと仰せ下されいかにも彼れは薬との事故つひ飲みて見んとも存じな
 がら勿體なきやうにて唯に過し申候郡長様が御隠居などにもあらば知らず我れどちが
 持薬に恐れがましければに候老爺が濁り酒あれこそは骨休めの樂しみに毎夜膳の上に
 徳利のせては嬉しげに舌打いたし致され候都の御かたこそ頭にも障り給ふべけれど此
 處なる鋤鋤とりには斯るにあらでは利き申まじく候貴嬢さま御文に御瓶づめのこと有
 りしと申せば扱も〜と額に手を加へてこれも與之と同じこと御出はいつと勝手の事
 ども老爺が迷惑おしはかるぞと御ことわりの有けれど何が此人そのやうに他處〜し
 くは存じ申べき土に手をつきても御入り待ち度こゝろさし世間の手前も鼻たかく思ひ

居るに候冬は御途中もいと寒し御覽に入るゝものも候はず大事の御身に風ひかせまし
 など恐れ入るべく候まゝ時候よろしく成り候ばい必らず御越し願度老爺こと御迎に出
 づべきかと申居り候御ことくしき御土産も願ひに候はず唯御顔みせませ給はらば此
 方には何よりの賜もの其うへ學校御針仕事いろくの藝に御心入れ人のほめ物に御成
 り下され候は一つは御兩親様へも此方が自慢申されぬべきこと萬のたまはり物にま
 して其事ども願はしく候御文に與之吉が清書何故見せぬとの仰せいかにも見ともなき
 書きやうを唯今までいたしたれば耻かして御覽には入れかねしの由此次の週より一
 心に書出で郵便にて御送り申べく手紙の文も自身かきて奉ると威張居り候御覽下され
 て充分の御小言願度又その折に私も書き添へ申べく御前様よりの御文をさても長手紙
 と笑ひ参らせしが此方はいよくにて斯く細かにしたゝめたれど猶尋にも餘り候い
 かにせば盡ぬべき言の葉ならん唯御めもじならではと思はれ候末に成りて恐入候へど
 御兩親様御はじめよろしう御傳へのやう願ひ上候 かしこ

●死去を吊ふ文

御父上様御こと俄に御容體かわらせ給ひ此曉に御かくれの由唯うち驚きて夢との

みたどられ申候此ほど御見舞に出し折は御氣色次第におよろしく召あがりものなど漸
 漸進ませ給へるやうに承りさて遠からず御全快の御事と御嬉しく存じつるを如何な
 る事ぞ十日の隔たりもなくして斯く成らせ給へる思へば御中なほりと申すの成りけんさ
 りとは今一度御目にかゝらぬを繰返し打敷かれ申候御帯だにとかで明くれつき添ひ御
 いたはり入らせられし御孝養その甲斐もなき事にて御前様が御歎き申すも中々に御傷
 はしく存じられ候さりながら御充分の御手當も盡させ給ひし御後のことなり斯るを浮
 世と思しめし御悲しびに御身をそこね給はぬやう致し度今は唯それぞ亡き御方への御
 孝に御座候御蠟一箱御靈前に御供へ下され候やう持たせ差出し申候今宵は私御通夜
 に参上いたすべく候へども取あへず御くやみまで あらゝかしこ

●同じ返事

父こと病中より一かたならぬ御心配をくだされしはくの御見舞かたじけなく必
 ず癒りて御禮にと當人も申つつけしを甲斐なきさまに成り候て夫れのみも殘惜しう存
 じられ候年には足らぬ處もなく候へど未だ我々兄弟何仕出でたる事もなく子のつとむ
 べき片はしをだに見せ候はぬほどに斯くなられるるを飽かず情なく思はれ申候おはせ

の通り唯しばらくの中なほりを今全快の兆ぞと喜びあつる心淺き言ひ出れば限りもなき事どもに候へど返らぬ事を今更の歎きは佛の爲にもいとわろしとの御いさめ實にと承られて思ひかへし申候佛前へと御志しの一箱かたじけなく直ちに供へ申べく候よろづ取みだしたるほどの御禮委しうも陳べあへぬはさる方に御見ゆるし下され度唯御請のみ かしこ

唯いさゝか

●日用文のこと

今やうの文章いとみだりがはしくさまゝの體しきりに出で来つ、あやしう鶴などいひつけて去る人々あざみ笑ふものさへありとや、さても其記事記行、隨筆説話のくさぐさは此處に用もなし、男子の書くなる拜啓、頓首も我がしらぬこと唯我れどもの間にいひ通ふ日用文のこと少し言はんとなり。

此手紙の文よ、雲井のよそに心をやりて人の世をはなれんともあらねば、目に見えぬおに神を感せしめんのですさびにもあらず年始暑寒のとひおとづれより、月花の折に友を誘ひ、新宅新居をいはひもし、愛ひ歎きを慰めもしつ、親しき中には忠告、教誡、唯まのあたりならば、とあり、かゝりと口にすべきを筆にいはせて心がよはさんまでの業なり、されば用語の六つかしきを求めず、極めてわき安くすなほなる言の葉もて、事の筋あきらかに、序正しう書なしたらば其ほかに事なかるべくやあらん。文をみるよりやがて其人がらは推量らるゝものといふを、いかに聞たがへてか常いふ言葉をいやしみて、耳どほくわきがたき雅言打まじえ、したり顔に書出る人のあるはいかなるにか、言葉は未なり、もとの心優ならば飾らずして人きゝなつかしかるべきを、らんだつなどの縞ものゝ上に掛きたらんやうの粧ひはいと怪しう不用のものなり、すべて殊更のつくるひは自づから打あはぬ處いで来て見るまゝに興さめぬべき業なれば、紙筆とりて打むかふ時まづ我がこゝろを顧みたらんぞよかるべき、假そめの手紙の文、なほ千載の後も残りぬべきものをなほざりごとに墨ぬりをくべきかは。かくいへばとて此文むづかしき物といふにはあらず、しひての切みを求めずして心

のまゝに書きいでんは平がなのわたり知り得たらんもの、誰れもたやすく成りぬべきこと、はやう我が知る何がしの女子、年たけぬるまで文字かくことを知らず、日々の用事親はらからのものにも聞えやらん便きなくいと佗しき由に歎きしが、おもひおこして三十の手習ひにいろは唯四十七文字をまなびぬ、さて文のこと書きならふに、まず、ませぬをば候にかへて、いつしか前文の體もそなへつ、いと長き用事をも一句、一句に點打ちつ、滞りなく書きおくる、いと珍らかに俄なる修業を、いかにして斯くはと問ひしに、何事にもあらず、もとより文法語格をまでたどりてあるべき際ならねば、あやまり書かじの一念にて唯この口にいふ事をもとつしつ、夫れに絶りてものせしなり、人、人に逢ふかならず言葉あり、寒暑の挨拶、疎遠の詫び、これをば文のはじめに書きて、やがて用事の物がたりに移る、これより彼れ、かれより此れ、口ならば無用の言葉にいたづらの時をも過すべきなれば、文には紙の限りあり、用なきことをすべて省きつ、唯いはんと思ふそれ計を書きつゝくるものなりと言ひき、げにこれこそは手紙の文の本意にて法といひ心得といふ此外にはあらざるべし、古人の文のいとよしといふを見るに、左のみ禮服つけたらんやうの打かしこまれる物にはあらで、

心詞つくりろひなく、さながら、筆づかひによるづの哀れも懐つかしさもこもりて、其時その人かくやありけんと推量らるゝ、こは作りものにてなるべきにあらず、文まなぶ人これに心をよせたらば奥深う何くれの教へをたどらんまでもなく、自づからにして好き文は書きいでらるゝ業なるべし。

さはいへど何の道にも稽古はかならずありぬべきこと、春の鶯谷を出で、軒ばの梅にこゑたて初る時、おのづからの調べ猶とゝなはず、しぶれるやうの節をかたなりとて愛くしうするものから、誠のこゑは鳴ならひての後なりけり、はじめより思ひのまゝに言ひいでもし書きいでもせんはいと難かるべし、常のならひ足らずして、いでさらば文かゝんと打むかふ人の、やがて心に筆のしたかはねば、もどがしう煩らばしう、いはいやと思ひし事も半ばかりに書きさしつ、あらぬ雑事せんかたなく交りて、我が心にも見ぐるしう甲斐なきやうにうとまるれば、おのづと怠りがちになりて退く心いで来るなるべし、何事も俄にてはあるべからず、日頃心は用ひて唯こゝもとに沸出るくさぐさの事どもを日記といふに書きならひて口にいふと筆にするといさゝかの隔てなくなりて、多く世間に交りたる人のおちせざるに同じこと、心安う文かき得

らるべきにやあらん、古人の文をよみならふいとよき事なり、きりとも一向にそのあ
と計おふやうに成りてともすれば、我が心よりほかなる事を生さかしがりとり出る又
みぐるしかるべし、人の人は人として我れは我が文をと心かくるやうあらまほしくよ
き文を見るは好き文を作り出ぬべき養ひばかりになさまほしきなり。

文は短かくして事のわき安きを第一と人のいふ、男のなれど本多の何がしが陣中よ
りの文いつくも引出されては世のほめ物にたへらるれど、そは折からによりたる
物なり、短かくて有りぬべき時あり、長さを人の樂しむことあり、遠くはなれて逢ひ
みるに難く唯大空を打ながめては、故郷の人々今いかさまに暮すらん、野山のさまも
なつかしく、彼の家、この家いかならん、里の童、鎮守の森とさまへ思ひつゞくる
折したしかるべき人より文のきたる、いかゞは喜しからざらん、封じをとくも鈍かし
う見るに、暑さ、寒さいかに暮し給ふ、此ほど此處にもかはりなし、御様承らばや
とのみあらんは口惜しき思ふべし、かゝる時の文の上には雑事とて打すつべきもの
なく、一もとの草、一頭の犬、媼も翁もことごとく見る人の慰めに成りてしばし旅寐
の憂さをもわするべく、げによき友よと其人いと懐かしうも成ぬべし、長さ尋に餘

るともこはわづらはしからぬこと、短かくてよがるべきは近火負傷の見舞すべて、不
慮のことに人の心あわたしからん折、いと長々と書きつゞけたる見るもうるさく中
中の心地ぞすべき、よろづに時といふは必らず見るべきものなり、ついでよろしから
ぬことは何ならねども人の心を痛め、煩ひをまし、思ひのほかの怒りを招く事もあり
人のもとへ物たのみにやる文に心づくべく、断りの文は猶さら、事のさま早く人の心
を破りぬべきなれば、そをなだらかに調へてやむを得ぬさま細かにつらね、實にと
なつかるゝやう言はんぞよき、老たる人に今様の生さかしき事いひおくと、其道の
心得なからんあたりへ我がしれるまゝ歌よみこみてやる共に無禮げなり、わかき男に
用ある折の文ことさらに慎しますばあるべからず、言ひつゞければ何がしくれがしの
事いと多く、心かくべき事さまゝあるべけれど、すべて事のさまを思ひはかり、文
かき出ぬ時なほざりならざるやう爲さまほしきなり。

こと通はする便りばかりには文字拙なくともわき安きをよしとすなれど、拙ながら
ぬや猶さらなるべし男の文だに楷書かたかなに書きたるはいかならん、まして女のこ
わごわしき筆づかひはいかばかり好き文章ならんとも先心おとりせらるゝ物なれば、

平がな能くならひて多くはこれにて續けたるこそ女しうはあれ。されば其假字格またみだりにすべからず。

馴れざらんほどは必らずした書き物すべきなれど、使ひ待たせおき取あへずのはしり書きなどにてあるべき折、ゆる／＼と書きあらため、文章つくろひ居るいともどかしや、心静かによく思ひめぐらし筆とれば忽ち書きつゝる事かなふべきやう平常に心ざしたらんにはしかず、さりとも取置きて後の證にといふやうなるは能とも書きかべ我が手もとにといむべきなり。

いかならん急ぎの折も、文かき終らば必らず一わたり讀みかへし見べきものぞ、心には思ひながら知らず落たる文字もあるべく、一字のあやまりにて意の通じがたき事などあらば其文つひに詮なかるべし。

其かきやう、天地の定めなど六づかしう言はんもうるさかるべし、唯見ぐるしからぬやうに心得たらば宜かるべきを、猶初まなびの爲にとて普通のこと三つ二つを。

●文かきやう

巻紙のはし幾寸幾分ともものさしの用もなければ始めより終りまで一向かきつむる物

にからず、いさゝかの餘白おきて、天地も行つまらぬほどにあらまほしく紙のつき目最初にあるも宜からぬ事なり、常陸の宮が實法なるさま今の世の文にも多々あれど、すべて女のものゝきは／＼しう規則めきたるはわろしといふならねど懐しからず、上はかならず揃へかくべきなれど行の末に文字の長短により、いさゝか引下げて傍に書きたるなど中々に景色よきものなり、一行は太く、一行は細く書きたる見よしと言ふもあれど、夫れも判然としたるは型のやうにこそあれ、一句のはじめに墨をつぐも悪ろからねどさては、押ならびて濃きこともあるべし、此文の面みよくせんは猶法則にのみよるべくとあらねばにや、斯くあるべき物ぞ斯くあれなどいひて教へられしを見るに、いと所せくのびらかならず、唯かじこまれる計にて見處もなきさまをぞしたる、物馴れたる人の書けるは何となき走り書きにも濃きうすき打交り、態とめかすして見にくからぬや、猶ならひのする業なるべき、されば彼の法、この法いつ方も書き試みて、さて文の面うるはしかるやうは我がおもふに任かせたる、中々に／＼のひぬべし。

●上におくべきと下に書く文字

最行の上に候をかゝす、最行の末に御の字をかゝざるやう心がくべし、やみ難きと

きは行をはづれ、傍書にする、仔細なし。

●前文

あるべき物なれど必らずと限れるにあらず、遠國他郷の隔たりたる人にいひ送る折さらすば打かしこまれるあたりへ申上る、夫れらみな川ふべし、文かき出ること皆皆様ます、御機嫌よくある、した、かなりや、まだ逢ひ見ぬほど五日も隔たらぬを、さりとて戯れたるやうにと打も笑まれ、心おとりもせらるゝ事ともすればある事なり、親しき中にて軽らかなる用事いひやる時は御ゆるしとだに言はでもよし、斯く定まれる詞ならでは機嫌のとひやう猶あるべきにこそは、此知れるあたりの小さき子、いつも文おこすごとに前がき同じからず、唯今軒ばに月の、ぼりて窓に竹の影をかしきを見ながら此文かき終りぬ、君には門にいで、や遊ばせ給ふ、燈火とりてや物よみ給ふ、御さま思ひやりてなど、折からをさながら書きおこす、いと懐かしうて、此方も無事に候とばかり見せられたるより嬉しきものなり。悔みの文は更なること出水地震何の見舞にも不幸を訪らふやうの折、前文用ふべきにあらず、此方より知らせやる時も同じこと。

●とちめの詞

今も猶めでたくかしく、と書く人あり、こは道理たがへるの由、正しくはあなかしこと書くべきなれど、唯にかしことしたるもよく、早々、あらくなど添ふるは文のさまによりてなり。

●月日かくこと

女の文に明治何年月とやうに書きたるは餘りしたゝかにて五月蠅かるべし、後の爲にと六づかき文ならば唯何年月日としたる、いさゝかは優れり、大かたには唯日ばかりを書きもすべく、何半ごろ、とも末とも書きてさしおくとよし、封筒の上親展、直披など女子たちの間に行はるゝ頃なれば年號までも書く要あらんや知らず、猶おほらかなるこそ懐かしうはおもほゆれ。

されども文のうちに、今日いかなる事しつるとか、明日何方へゆかばやと思ふなど書き出る頃、日づけたしかならずは見る人までふべし、こは心すべき事なり。

●宛名

父上様、母上様は更なり、伯父様、いづれも目うへの名はかゝす、數多き近親の似

よりたるある折は何がしの里姉上様といふやうに書くべし。同じほど少し目したの
 とには名のみを書きて、つる様、龜次郎様、などあらばよかるべし、何の何がし様と
 姓名ひとしく書くは謹める折のことなり、封のそとにはばかり姓名かきて中には、誰姓
 のみを書く事もあり、若き男にいひおくるには人のも我れの名のみ書くべからず、
 姓名あきらかと言ひ傳ふるは親しみに似て打とけめかしければなるべし、大かたは
 苗字のみにてもありぬべくや、女友達の親しき中には何子様御もとに、何子とばかり
 書きたる、いとよし、いたく尊とべる人には何がしの君になど書く、大人、高臺、な
 ど女のいふ詞ならねど、ぬしと言へるも猶人によるべし。大方は様の字こそ用廣きも
 のにはあれ、殿といふも左のみ書かぬこと、ふるくは大將どの、内大臣どのなどもい
 ひしを、今様にはいたくおし下げたるやうに聞えて、唯めしつかひなどの許にぞ。

●脇づけ

あて名の傍へは、人により處により、御前に、御許に、人々申給へ、人々御中、申
 給へ、御文机のもとに、まゐらす奉るなど書くべし、玉案下、座右、など書くはわる
 し、人々申給へは御もと様より御披露願ひまつるの意なれば親しき人への言葉ならず

人々御中も同じやうのもの、御前にはいと尊べるにて、御もとに、御文机のもとにな
 どこそ常々いひかよふには書くべけれ、返事の折には、御返し、御請、など書くべし。

●なほ／＼書

本文に言ひ餘りたるを折かへし言ひ出るにて、追書ともこれを言ふ、本文はじめの
 行の前より、少し引さげて間ひ／＼へ細かく書き入るゝこともあり、末の白きへ書く
 事もあり、近き頃までは誰れも／＼法則のやうに守りて猶々、かへす／＼など書きつ
 る物なれど、さあらでも宜き事なるべし、思ひのほかにと取落したる用を夫れよとあ
 より書そふるなれば取わき景色のよかるべきにもあらず、無くてもありなん、有りて
 も佗しからず。

●文の中に顯はるゝ時

月の夜、花のあした、何こゝろもなく打ながめ居る折に友のもとより文の來たる、
 華奢なる封筒のまづなつかしく、糊はなちて見れば折にあひたる繪半切れのうつくし
 きに、優なる筆つき墨の香にあひて、いと哀れなるを二言三言、打まじへ書いたる歌
 のさまなど、身にしみて忘れがたきものなり、雪にも雨にも思ひがけの折の音づれを

得たるは唯にてだにも嬉しきを、歌のそへるはいふべくもあらず、さて其かき入る、やうは、ことごとくしう本文と引はなちかぐは宜からぬよしなり。初句たゞ一字ほかより下げて書はじの、やがて結句は本文につけたる然るべしとぞ、色紙のやうに書くもあれど猶此わざとならぬこそよけれ。

●しめのこと

状封じて墨を引くこと古くよりの法なりとぞ、封、緘・鎖・糊、いづれも女のものならず、まして此處に検印おしたるいかなる心にかと怪し、たゞとばかり書てありぬべきぞ。

●くさく

郵便にて文さし出す時、切手のこと心づべし、いさゝか量おもければ、やがて人のもとに罰かうむらする、みづからは知らぬ事にて禮を欠くなん、いかば口惜じからぬ。人のも我れのも處がきあきらかにして、あやまりても我が手もとには立かへるやう心がくべし。封の中には二つなき心をも籠めをくものを、没書といふこといと佗しかるべし。

返事は成るべく速かにさし出さんこそよけれ事故ある時は猶さら、唯折にふれたる音づれにも、おこせし人は待らん物をなほざりに打おくとわろし、彼方よりのをよく読み味ひて待ち見る人の心ゆくばかり事こまやかに物すべし。一わたり見渡したる計にては思ひの外あやまちも出で来る物なり。

尙ほ文のことさま々あるべしといへど、大かたは人々の心もちひ一つにて如何さまにも成りぬべきを、あなぐたくしやとてなん。

一葉全集前篇終

明治四十五年五月
明治四十五年五月



發行所

東京市日本橋
區本町三丁目

博文館

總發行所 東京市日本橋區本町三丁目
電話號碼 三六二〇番

一葉全集前編

定價金壹圓

著者

樋口 兼

發行者

東京市日本橋區本町三丁目八番地
大橋 新太郎

印刷者

東京市小石川區久野町百〇八番地
水谷 景長

印刷所

東京市小石川區久野町百〇八番地
博文館印刷所

日本最近の文豪 福地先生の靈筆に 渴せる者は必ず 本集を讀め

櫻癡全集

全三冊
 美裝 三六列 函入
 各冊 一千一百頁
 正價 每冊 金壹圓廿錢
 小包料 各金 八錢

博文館發行

櫻癡先生の文は瀟洒にして簡明、殊に淡粧の中に絢爛の趣を具へたるは江戸子氣質なる先生の特色を最もよく發揮して餘蘊なし、今先生生前の述作中其粹を抜き妙を蒐め以てこの三卷を成す庶幾くは先生の彩筆に渴する者の望を満たすを得ん乎。

上編	中編	下編
◎卷頭著者小照 ◎東鑑拜賀卷 ◎芳哉義士譽 ◎あはれ浮世 ◎小楠公 ◎扇の恨 ◎女俠駒形お仙 ◎關原譽凱歌 ◎平野次郎 ◎求塚身替新田 ◎喜劇二人袴 ◎新作夜の鶴	◎人生五光線 ◎斬 ◎奸 ◎女浪人 ◎小説花懺悔 ◎廻る因果	◎偽稱紳士 ◎色慾二筋道 ◎陰陽大和錦 ◎車善七 ◎仙居の夢 ◎出放題 ◎鳥居甲斐 ◎高島秋帆

故國木田獨步君著

獨步全集

全二冊
 洋裝菊判特製函入美本
 著者肖像及寫真版挿入
 前後編 正價各金貳圓
 小包料 各金拾貳錢

前編	後編
◎牛肉と馬鈴薯 ◎運命論者 ◎巡查 ◎酒中日記 ◎富岡先生 ◎空知川の岸邊 ◎郊外 ◎鎌倉婦人 ◎神の子 ◎源をち ◎星 ◎園遊會 ◎春の鳥 ◎少年の悲哀 ◎夫婦 ◎河霧 ◎小春 ◎遺言 ◎初孫 ◎岡本の手紙 ◎わかれ ◎置土産 ◎湯ヶ原より ◎日の出 ◎非凡なる凡人 ◎雷の悲み ◎馬上の友 ◎惡魔 ◎正直者 ◎第三者 ◎女難	◎竹の木戸 ◎二老人 ◎泣笑ひ ◎渚 ◎たき火 ◎おとづれ ◎詩想 ◎忘れぬ人々 ◎まぼろし ◎鹿狩 ◎二少女 ◎帽子 ◎あの時分 ◎死 ◎波の音 ◎號外 ◎歸去來 ◎別天地 ◎初戀 ◎絲くづ ◎非凡人 ◎武藏野 ◎入郷記 ◎湯ヶ原ゆき ◎疲勞 ◎眩の侮辱 ◎都の友へB生より ◎節操 ◎窮死 ◎戀を戀する人 ◎暴風

博文館發行

輯共 君案思橋石 君波小谷巖

著 君 山 眉 上 川 故

一(容 内)一

- 第一編 ○雪折竹 ○風流狂言記 ○お駒 ○有明 ○青葉 ○大さかつき ○書記官 ○うらおもて ○鹿子絞 ○島田くつし ○奥様 ○船橋 ○柴栗 ○うつけ貝 ○癡醒 ○いさゞ川 ○碧水志 ○逸樂編 ○黄昏 ○座影 ○絃聲
- 第二編 ○梅紅葉 ○左卷 ○野人 ○行衛 ○二重帯 ○一軒百姓 ○鶴澤橋 ○三銃士 ○春宵 ○虚偽の價 ○落葉 ○爪木折 ○綾小袖 ○春潮 ○片影 ○滑稽相續三人 ○男 ○落標 ○萬平 ○凡人界 ○妖艶 ○弱氣質 ○希望 ○小妾記 ○喜劇仙臺平 ○裏座敷 ○明眸 ○小町紅
- 第三編 ○新家庭 ○昔の戀 ○梅の寮 ○同胞 ○魔道 ○一夜天下 ○寶の山 ○千紅萬紫
- 第四編

幽艶にして清迥なる眉山氏の筆は眞に明治の華文なり況んや其想。おのづから當代の重きをなして、而も追爾として迫らざる處、我文壇の重鎮たり。今や斯人亡くして、其著作の金聲玉振の響を傳ふ。本書に收めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏の絶倫の盛名を擅にせしめたるもの、實に是れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家の面影なり。

全四冊菊判特製
表装美麗紙數
一冊八百五十頁

正價 金壹圓八拾錢
全部 金六圓貳拾錢

小包料一冊金拾貳錢

眉 山 全 集

博文館發行

輯共 君案思橋石 君波小谷巖

著 君 葉 紅 崎 尾 故

一(容 内)一

- 第一卷 ○色懺悔 ○新桃花扇 ○南無阿彌陀佛 ○戀の蛻 ○夏瘦 ○新色懺悔 ○猿枕 ○七十二文命の安賣 ○風雅娘 ○巴波川 ○拈華微笑 ○此ぬし ○關東五郎 ○文ながし ○わかれ蚊帳 ○二人むく助 ○二人女房
- 第二卷 ○伽羅枕 ○むき王子 ○夏小袖 ○おぼろ船 ○紙きぬた ○戀の病
- 第三卷 ○三人妻 ○男ごころ ○袖時雨 ○俠黒兒 ○心の闇 ○むらさき
- 第四卷 ○隣の女 ○鷹料理 ○冷熱 ○青葡萄 ○不言不語 ○三箇條 ○浮木丸 ○八重櫻
- 第五卷 ○多情多恨 ○千箱の玉章 ○安知歌貌林 ○寒牡丹
- 第六卷 ○金色夜叉前編 ○金色夜叉中編 ○金色夜叉後編 ○續金色夜叉 ○續々金色夜叉 ○新續金色夜叉 ○煙霞療養 ○紅葉山人傳 ○紅葉著作年表

全六冊菊判特製
表装美麗紙數
一冊九百五十頁

正價 金壹圓八拾錢
全部 金拾圓

小包各金拾貳錢

紅 葉 全 集

博文館發行

二七〇四〇

古今第一流講談師講演

(博文館發行)

講談文庫

各冊洋裝四六判上製
紙數各四百五十頁以上
木版錦繪挿入

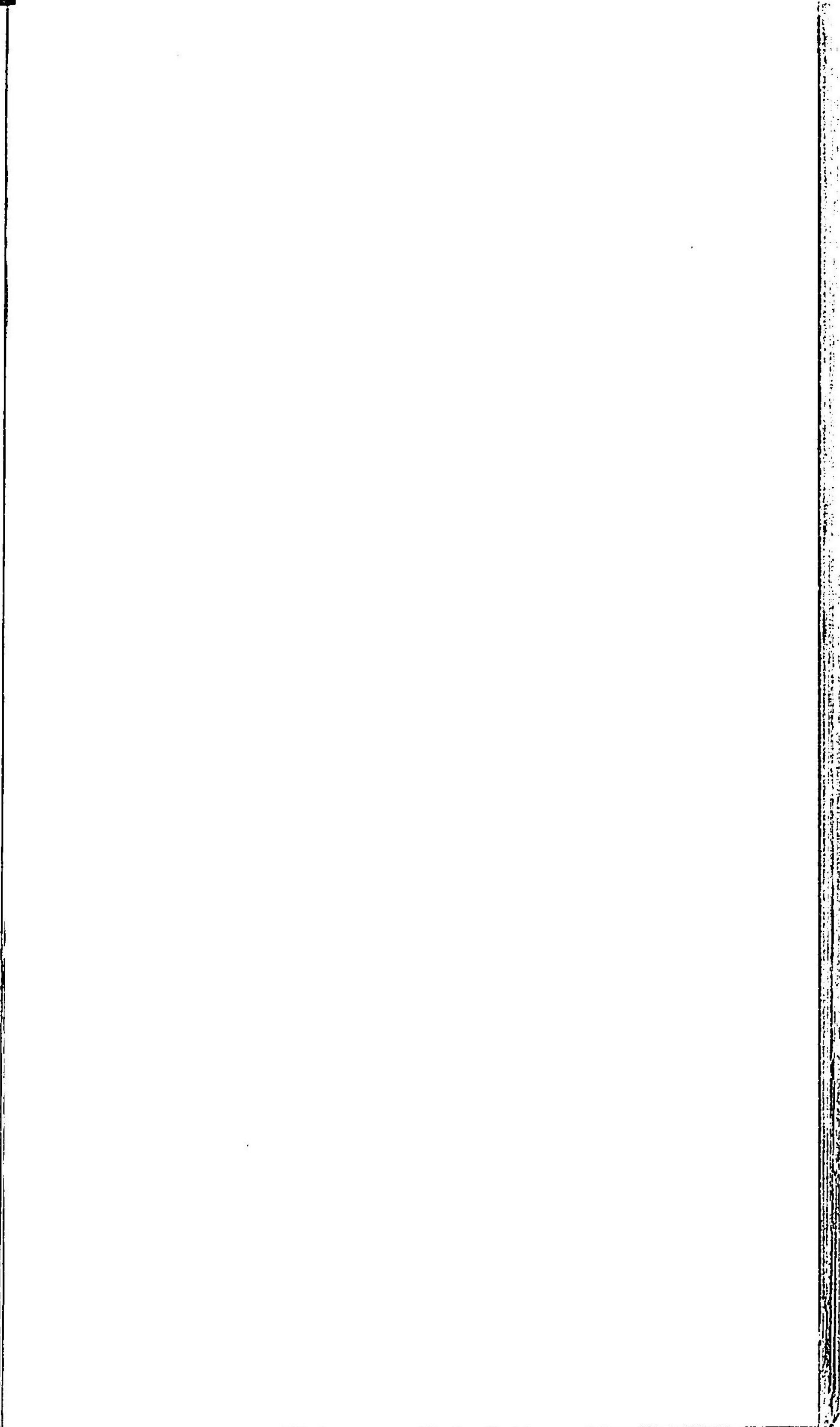
正價各冊金五拾五錢

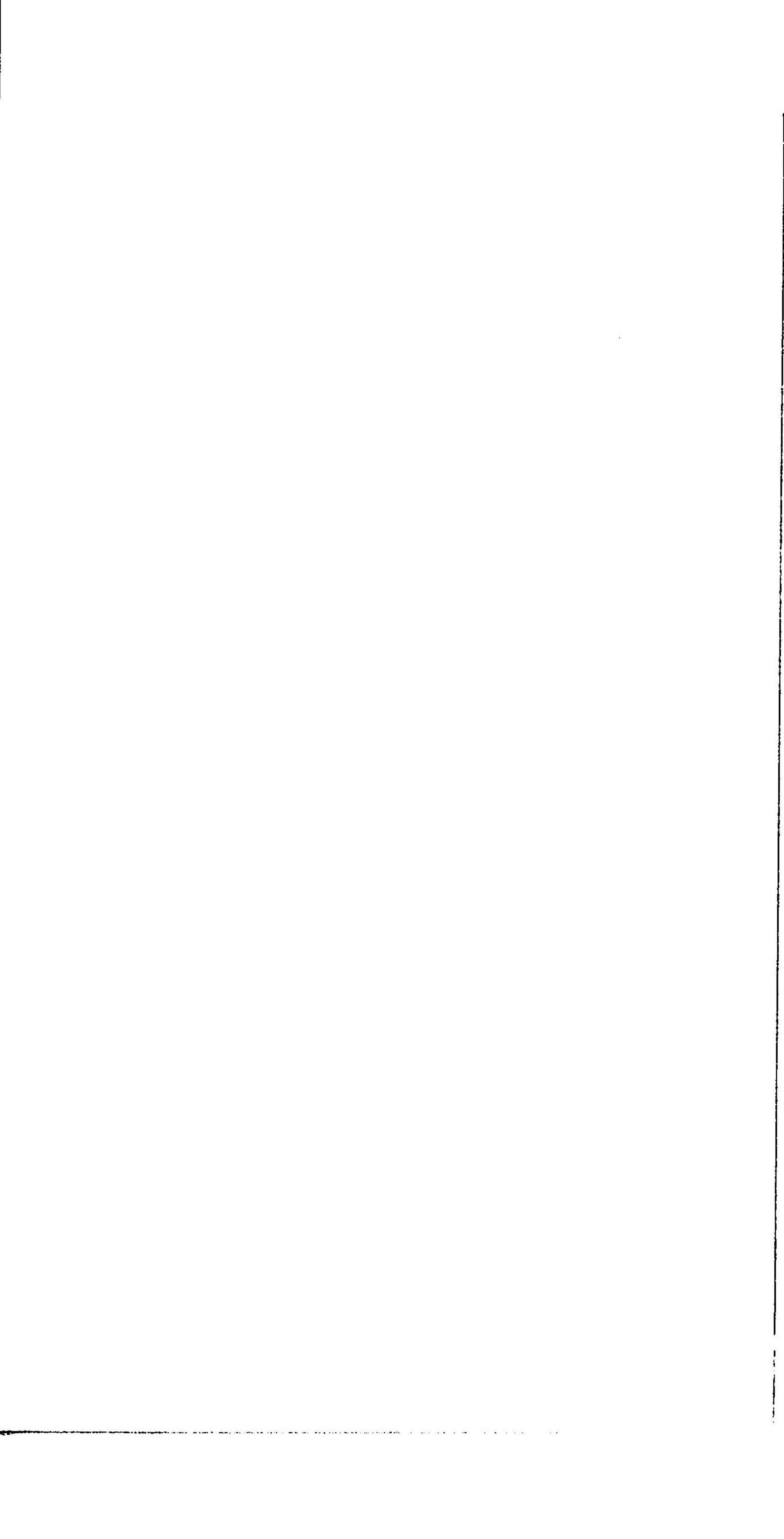
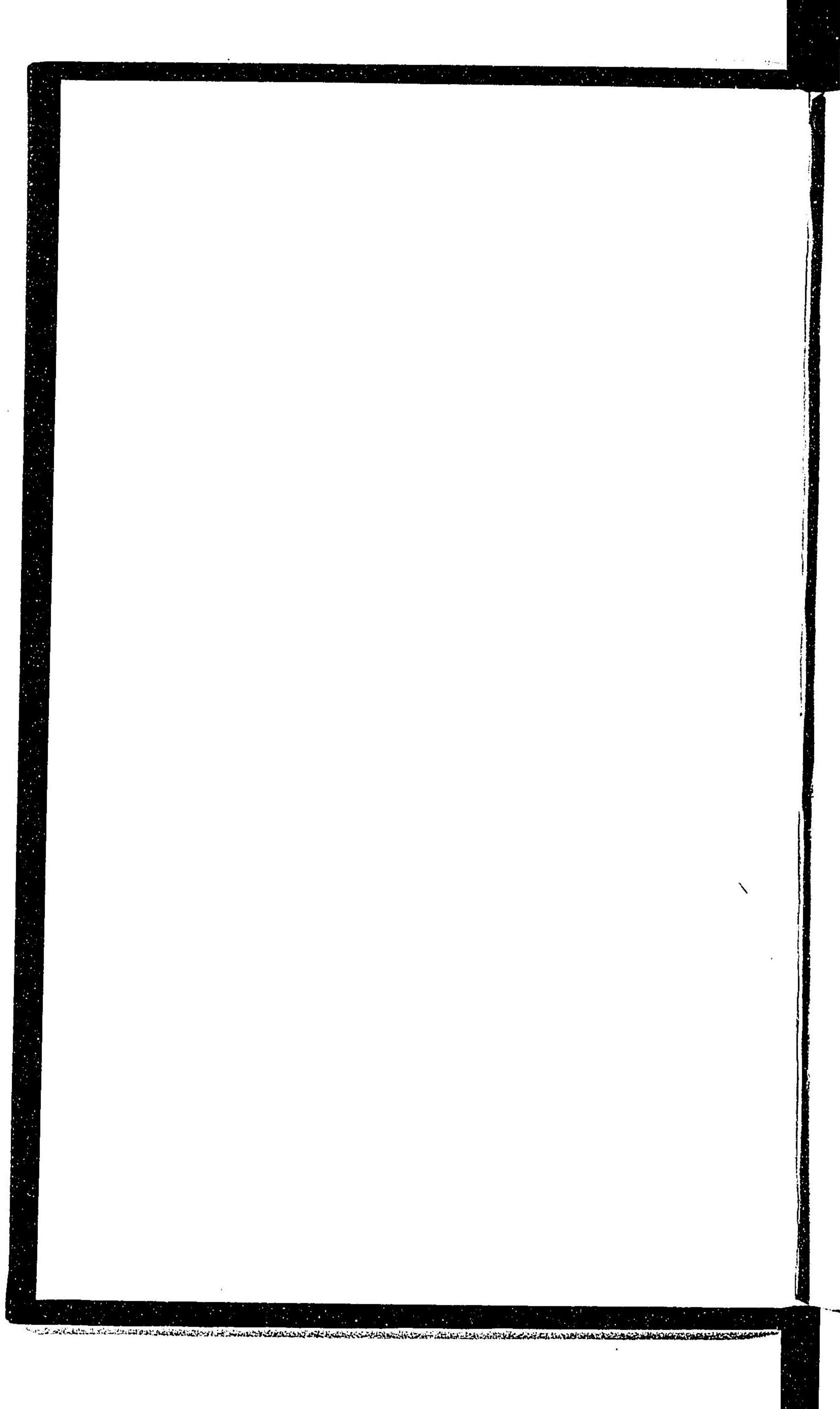
小包料各金八錢

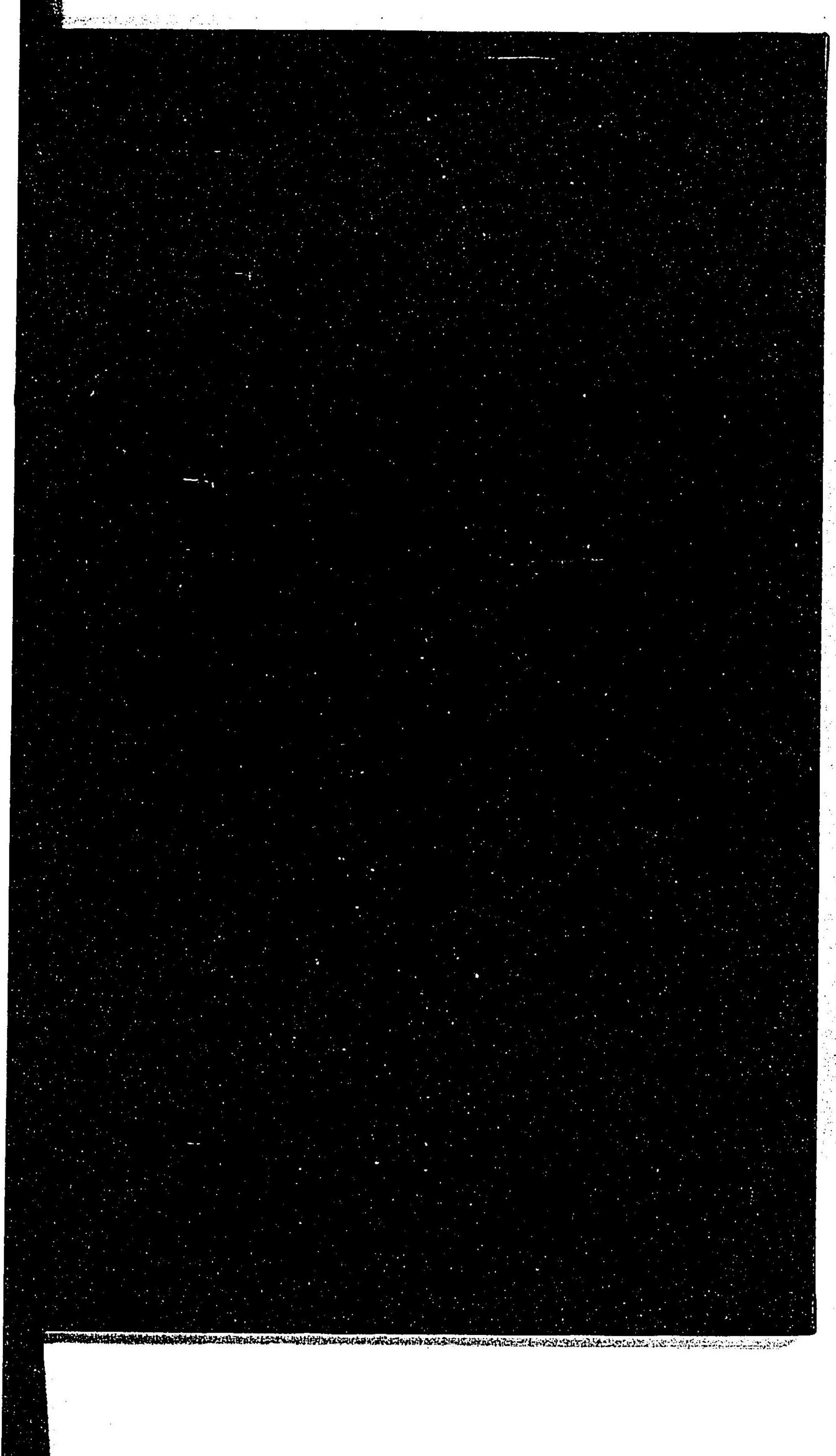
既刊書目

- ◎忠臣蔵 全二冊
- ◎義士銘々傳 前編
- ◎義士銘々傳 後編
- ◎武勇傳 前編
- ◎武勇傳 後編
- ◎天岡裁判 全三冊
- ◎俠客傳 全三冊
- ◎出世譚 全三冊
- ◎名士譚 全一冊
- ◎武士氣質 全一冊
- ◎怪談集 全一冊
- ◎人情話 前編
- ◎人情話 後編
- ◎力士傳 全一冊
- ◎義士外傳 全一冊
- ◎名妓傳 全一冊

本書は古今名代の講談師が特に其得意の人物のみを撰抜して、談師が特別に其得意の人物のみを撰抜して、毎巻讀切講演したるを、集めてたるものなれば、讀んで面白き事無類なり。家庭夜話の資料として、及び、右の好伴侶として、世に傳ひ







74

56ホ

084856-001-7

74-56ホ

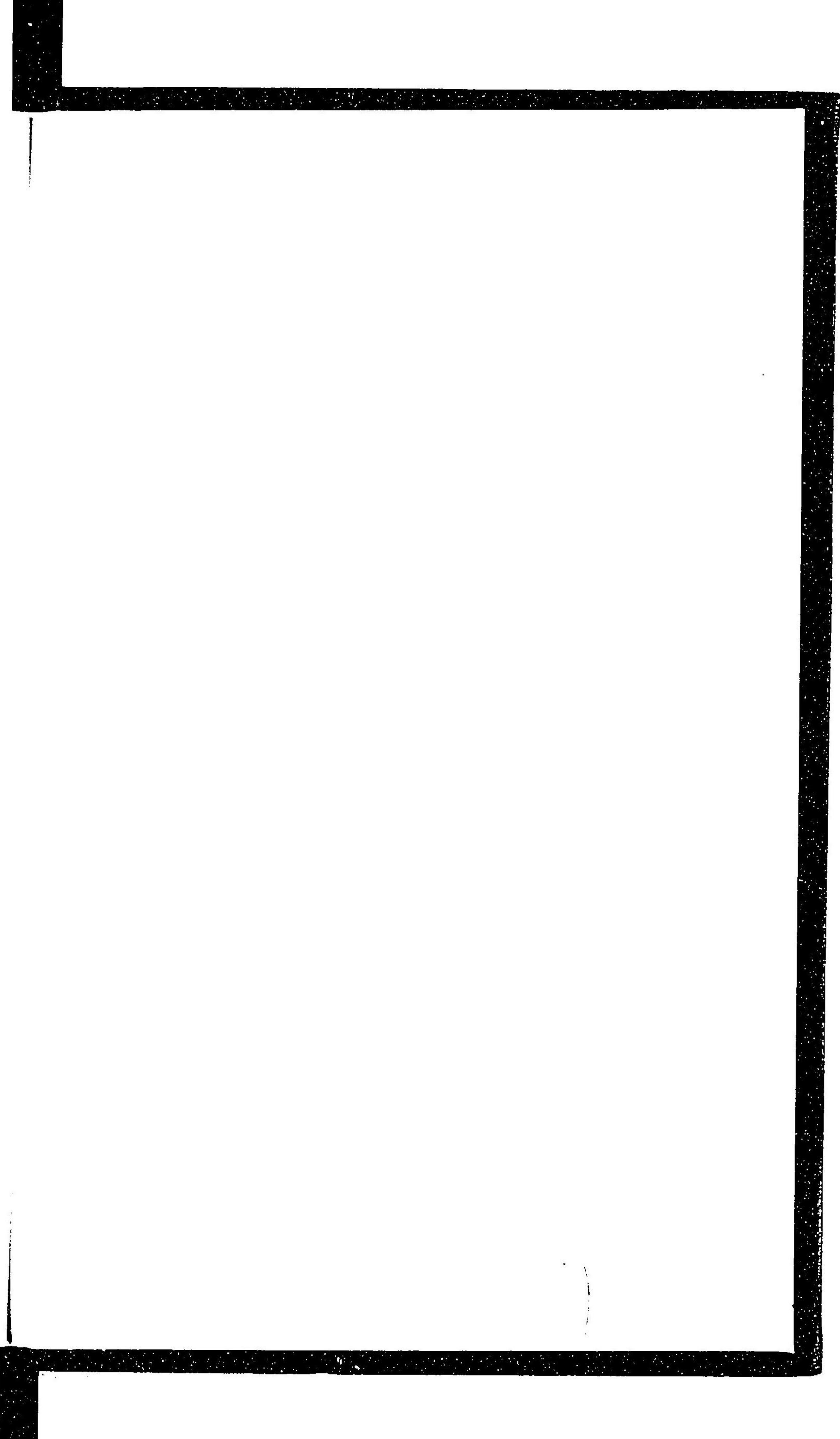
一葉全集

樋口 一葉/著

M45

DBB-0003







1
2
3



4
5
6